

2020年8月2日 大井バプテスト教会 礼拝説教

説教題「恐れるな、小さな群れよ」ルカ福音書12章22～34節

主任牧師 加藤 誠

「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる」

(ルカによる福音書12章32節)

先週の定期総会で、2020年度のテーマと聖句が約四ヶ月遅れで選ばれました。テーマは「主に信頼する」。聖句は「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神に国をくださる」です。この御言葉を通して、主なる神が今、何を私たちに語りかけておられるのか。一人ひとりが黙想し、この一年を通して考え続け、時に互いに与えられた思いを交わし合いながら歩むことができたらと願います。

この御言葉は「思い悩むな」という主イエスのメッセージの中で語られている言葉ですが、今朝は特に二つの言葉に注目してみたいと思います。

一つは「小さな群れよ」という呼びかけです。ここで「小さな群れよ」と呼びかけられているのはどのような人たちなのでしょう。直前の文脈で言えば「信仰の薄い者たちよ」(28節)の言葉が重なります。「何を食べようか、何を着ようか」と日々思い悩んでいる「信仰の薄い者たち」です。主イエスから目をそらすと、たちまち周囲に吹き荒れている嵐が気になり、心配になり、湖の中に沈んでしまう者たちです。主イエスに腕をつかんで引き上げてもらわなければ、自分の力では立ち上がれない、ズブズブと沈むばかりの者たちです。五千人以上のお腹を空かせた人々を前に「あなたがたの手で食べ物を用意しなさい」という主イエスに、「どうしてそんなことができるのでしょうか！」と文句を言い始める者たちです。そしてまた、主イエスがひとり夜を徹して血を滴らせるような祈りをされている、そのすぐ近くで居眠りをするような者たちです。

また「群れ」という言葉は、新約聖書ではほとんどの場合、羊に用いられています。羊の群れは「羊飼い」を必要とします。「羊飼い」がいないと羊の群れはたちまち散り散りバラバラになってしまうからです。なぜなら羊たちは視力が弱く、視野が狭いため、目の前に動くものがあつたり、食べものがあると、それに気を取られて道からそれてしまうのです。羊に先立って「こちらだよ」と正しい道に導いてくれる「羊飼い」を必要とするのです。ヨハネ福音書10章では、羊のために命を捨てる「良い羊飼い」である主イエスによって羊の群れは豊かに養われ、今、囲いの外にいる羊たちも導かれて、やがて「一つの群れ」になると約束されています。しかし、羊たちが「良い羊飼い」から目をそらし、それぞれ勝手に歩みだすなら、その群れはあっという間に散り散りバラバラになってしまうのです。

二つ目に注目したいのは「恐れるな」という言葉です。新約聖書の福音書では「恐れるな」という言葉が大切に使われています。「恐れるな」という呼びかけは、ま

ずバプテスマのヨハネの父に選ばれた祭司ザカリヤに向けられています。そしてイエスの母マリア、父ヨセフ、そして野原で野宿する羊飼いたちにも向けられるのです。「そんなことがありえるのか？」と、人々には想像しえない不思議な方法で神の国の働きを実現されていく神に、すべてを信頼し、従ってくるようにと、彼らは招かれたのでした。

また「恐れるな」は、主イエスが弟子たちを神の国の働きに招く時に用いられる。例えばペトロは、「恐れることはない。今からあなたは人間を取る漁師になる」という約束と共に主イエスに従う人生に招き入れられました。またマグダラのマリアは主イエスの遺体に香油を塗るために出かけた墓で、「恐れることはない。行って、わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこで会うことになる」という主イエスの言葉と共に弟子たちのもとへ遣わされています。いずれも不思議な、人間の知恵では理解しかねる言葉です。ペトロもマリアも「なるほど！そうですね！」と納得して従ったわけではないでしょう。「良く分からないけれど、とにかくイエスさまがそう言われているし、イエスさまと一緒に行ってくださるといふのだから、やってみようか」という半信半疑での歩み出しだったのではないのでしょうか。主イエスが私たちに体験させてくださる「神の国」（神の慈しみ、喜び、安らぎ、希望など）は、私たちには理解しきれない、不思議に満ちた出来事であり、時に「恐れ」が伴います。しかし「恐れるな。大丈夫、わたしも一緒に行くから」と、主イエスは私たちを、ご自身の神の国の働きに招かれるのです。

昨年クリスマス前に、北区赤羽にある東京北教会の魯孝錬（ノ・ヒョリヤン）牧師が脳梗塞で倒れて、右半身麻痺の状態になりました。まだ四十代の若い先生で、教会はちょうど新しい礼拝堂を建てるために、土地を購入しようとしていた矢先でした。入院当初、魯先生は言葉を理解したり、話したりする機能がすっかり失われたために、その回復が心配されていましたが、懸命なりハビリの結果、先週7月26日に約八か月ぶりに、東京北教会の礼拝メッセージに立たれました。魯先生によると「入院直後は、このまま生きていて何の意味があるのだろうかと思ひ、神への信頼、神の救いを語る力を見失いました。けれども、ある時、礼拝の説教を聞きました。すべてを失ったヤコブに、主が語りかけておられる場面でした。何度も何度も聞きました。すべてを失ったとき、まったく新しい方法で神さまは新しい道を示してくださることを信じます。これから皆さんと一緒に神さまの力を再発見していきたいです」と語られていました。無から有を生み出される神は、今日もご自身の神の国の不思議に私たちを招いてくださっているのです。

コロナ禍にあって先行きがますます不透明で、建築のことでも不安が大きくなっている私たちですが、私たち「小さな群れ」を「良い羊飼い」として牧してくださる方の語りかけに、心を澄ませて共に従って行きたいのです。